

20 世紀日中関係と中国考古学研究

吉開将人（よしかい まさと）
北海道大学文学研究院
東洋史学研究室

はじめに

- ・ 考古学という学問が持つ性質は、遠近両極端で誤解を招きやすい。
- ・ それは、専門性という「わかりにくさ」と、大衆性という「わかりやすさ」である。
- ・ これら「わかりにくさ」と「わかりやすさ」はともに社会と国家に直結する性質を持つ。
 - （1） 専門性：測量・発掘の特殊技術⇒土地などの利権の解決、地元民の協力が不可欠
 - （2） 大衆性：成果がもたらす「歴史のロマン」⇒神話・ナショナリズムに直結
- ・ 外国考古学である場合、考古学という学問が持つこれら二つの性質によって、日本人の研究者の調査活動は相手国の社会状況や日本との国際関係から強い影響を被ることになり、研究課題の設定も制約される。
- ・ それを反映しているはずの日本人による中国考古学研究の歴史は、まぎれもなく「日本人の中国研究の軌跡」の一部であり、中国に対する関心の変化や日中関係の変化を映し出す鏡である、というのが今回の報告の趣旨である。



1957 年中国科学院招聘の「訪中考古学視察団」

（前列向かって右から水野清一・駒井和愛・郭沫若・原田淑人・周恩来・杉村勇造・不明）

- ・ なお、報告者はすでに考古学界から離れており、当事者として責任ある立場にないので、「軌跡と現在」のうちの「現在」についてはあえて語らないことにする。

【参考：本日報告の基礎となる報告者の業績】

（1）戦前日本の文化事業の一分野としての日本の東亜考古学

- ・ 「東亜考古学と近代中国」岸本美緒編『岩波講座「帝国」日本の学知 3 東洋学の磁場』岩波書店、2006年、135～174頁（「日本東亜考古学之形成与中国近現代學術之興起」甘懷真編『東亜歴史上の天下与中国概念』国立台湾大学出版中心、2007年、285～324頁）
 - ・ 「殷墟をめぐる日中関係—近代日本と民国學術史（一）」『北海道大学文学研究科紀要』137、同研究科、2012年、1～31頁（「近代日本学者与殷墟考古」李永迪主編『紀念殷墟発掘八十週年學術研討會論文集』中央研究院歴史語言研究所、2015年、25～50頁）
- （2）日本の東亜考古学への協力／対抗者としての中華民国考古・歴史学界
- ・ 「歴史学者と国土意識」飯島渉編『シリーズ20世紀中国史 2 近代性の構造』東京大学出版会、2009年、81～102頁
 - ・ 「中国民族史像と考古・歴史ナショナリズム」『歴史と地理』679、山川出版社、2014年、1～14頁
- （3）戦前日本の歴史・考古・民族学者たちの南中国に対する関心と南中国考古学の特殊発展
- ・ “One Century of Bronze Drum Research in Japan”, *Transactions of the International Conference of Eastern Studies*, No. 49, Tokyo: The Toho Gakkai, 2005, pp. 23-40
 - ・ 「歴史学者と『南支那』」松浦正孝編『昭和・アジア主義の実像—帝国日本の南進と台湾・「南洋」・「南支那」』ミネルヴァ書房、2007年、54～77頁
 - ・ 「苗族史の近代—漢族西來說と多民族史観」『北海道大学文学研究科紀要』124、同研究科、2008年、25～55頁
 - ・ 「鳥居龍蔵と銅鼓研究—鳥居を『民族史学者』へと導いたもの」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』1、同博物館、2013年、149～169頁
- （4）中国国内の考古学・文化財事業の近現代史
- ・ 「近代中国における文物事業の展開—制度的変遷を中心に」『歴史学研究』789、歴史学研究会、2004年、52～62頁
 - ・ 「現代中国における遺跡・神話をめぐる政治力学—『涿鹿』の歴史は誰のものか」『歴史学研究』998、歴史学研究会、2020年、25～37頁

1、甲骨・殷墟と東亜考古学

- ・ 「甲骨」「殷墟」とは？

（1）前史

明治二六（1893）年：鳥居龍蔵、東京帝国大学理科大学人類学教室標本整理係となり、坪井正五郎に師事。

明治二八（1895）年：鳥居龍蔵、初の海外調査で遼東半島の遺跡調査【下関条約、三国干渉】

明治三五（1902）年：鳥居龍蔵、「西南支那」調査（～1903年）。九月、濱田耕作、東京帝国大学文科大学入学、西洋史学専攻。

明治三八（1905）年：六月、東京帝国大学に東洋学研究談話会開催（白鳥庫吉発起、鳥居龍蔵補助、参加者：坪井九馬三・坪井正五郎・那珂通世・市村瓚次郎・桑原隲蔵・池内宏・今西龍ほか）。七月、濱田耕作、東京帝国大学文科大学卒業、卒業論文題目は「希臘美術の東漸を論ず」、同大学院に入学、研究題目は「日本美術史特に外国美術との関係」。原田淑人、東京帝国大学文科大学入学。



戦前日本の東亜考古学者たち

(左から梅原末治・濱田耕作、右から駒井和愛・江上波夫・原田淑人)

明治三九（1906）年：九月、京都帝国大学文科大学創設。十一月、南満州鉄道株式会社設立。

明治四〇（1907）年：一月、白鳥庫吉、内藤湖南・富岡謙三（謙蔵）と京都に会し、東洋学の振興について面談（湖南書信）。四月、満鉄調査部設置。五月、京都帝国大学文科大学東洋史学講座開設。六月、内藤湖南は内田・狩野・富岡と連携し、「東亜考古学」を構想。十月、内藤湖南、京都帝国大学文科大学講師を嘱託、東洋史学講座を担当。小林胖生、満鉄入社（島村も同期か？）。



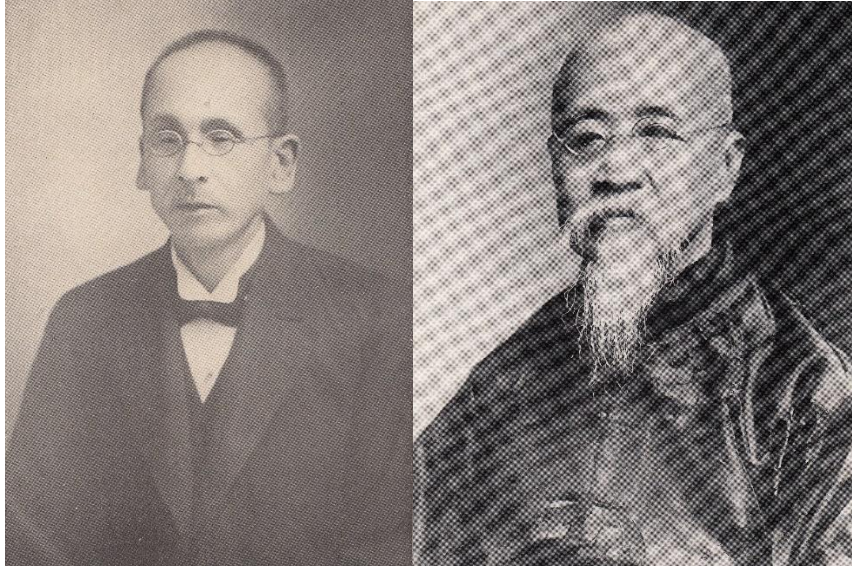
東亜考古学の形成を後押しした東洋学者たち

(左から狩野直喜・内藤虎次郎（湖南）・小川琢治)

明治四一（1908）年：五月、原田淑人、東京帝国大学文科大学史学科卒業、卒業論文題目は「明代の蒙古」、同大学院に入学、研究題目は「中国風俗史」。

明治四二（1909）年：一月、満鉄東京支社内に満鮮歴史地理調査部設置。ペリオによって敦煌文書が北京にもたらされる。五月、東京の文求堂が国内初の甲骨販売。日本への甲骨伝来。九月、濱田耕作、京都帝国大学文科大学講師（考古学美術史）を嘱託、京都に赴任。九月、ペリオが北京を訪問し、羅振玉らに敦煌写本・文物を披露。十一月、京都帝国大学史学研究会で敦煌関連史料の展示。この年、白鳥庫吉「支那古伝説の研究」を発表（「堯舜禹抹殺論」）。

明治四三（1910）年：東京高等師範学校教授の林泰輔による甲骨論文、『史学雑誌』に連載。東京帝国大学は支那史学科を東洋史学科に改称。八月、京都帝国大学、内藤・小川琢治・濱田耕作ほかを、敦煌文書・甲骨調査のため、北京に派遣。十月六日～十三日、小川・濱田、洛陽・龍門石窟踏査。内藤湖南、大谷探検隊将来の中央アジア発掘品を調査、八月発表。坪井九馬三によって東京帝国大学文科大学に「列品室」設置。この年、羅振玉は『殷商貞卜文字考』を刊行し、甲骨の由来が河南彰徳（今の安陽）であることを指摘。



日本と中国の甲骨学の先駆者たち

（左：林泰輔、右：羅振玉）

- ・ 殷墟甲骨の伝来と 1900 年前後の東洋学勃興の時代
- ・ 漢学・支那学的関心を持つ林泰輔・内藤
- ・ 清末・辛亥革命における新史料の時代を背景

（2）殷墟を目指す漢学者たち

明治四四（1911）年：春、羅振玉の弟・羅振常が河南彰徳（今の安陽）小屯を実地調査し、甲骨を獲得。十一月、羅振玉・王国維、大谷光瑞の勧めにより、渡日。【辛亥革命】

大正二（1913）年：三月、原田淑人は東京帝国大学文科大学の副手を囑託される（列品室担当）。濱田耕作は京都帝国大学文科大学助教授に任じられる。

大正三（1914）年：一月、満鉄は満鮮歴史地理調査部を廃止し、事業を東京帝国大学文科大学に移管。細川護立侯爵、殷墟発掘計画で、林泰輔と面会？三月、京都帝国大学文科大学陳列館落成。この年、坪井九馬三によって東京帝国大学文科大学で史学科の授業として考古学の講義が設けられ、九月、原田淑人が講師を囑託されて担当。

大正四（1915）年：三月、羅振玉・王国維帰国、同月、日本に戻る。

大正五（1916）年：二月、王国維帰国。九月、京都帝国大学に考古学講座設置、濱田が担当。

大正六（1917）年：一月、王国維、羅振玉の招きで渡日。二月、王国維帰国、「殷卜辞中所見先公先王考」発表、七月、王国維「殷周制度論」発表。九月、濱田耕作、京都帝国大学教授に昇任。

大正七（1918）年：林泰輔・諸橋轍次、四月～五月にかけて中華民国に出張。殷墟踏査。

大正八（1919）年：四月、東京帝国大学文科大学は文学部と改称。羅振玉、帰国。



羅振玉帰国送別会（1919年6月）

（前列左から五人目が犬養毅、六人目が羅振玉、七人目が富岡鉄斎、中列左から三人目が小川琢治、五人目が狩野直喜、十人目が内藤虎次郎、後列左から五人目が濱田耕作、十二人目が桑原隲蔵）

大正十（1921）年：四月と七月、北京留学中の諸橋轍次は、林泰輔の要請で二度の殷墟踏査（一説に1920年）。アンダーソンの仰韶村発掘。林泰輔、日本に将来された甲骨を集成考証して『亀甲獣骨文字』上梓。八月、原田淑人は東京帝国大学助教授に任じられる。

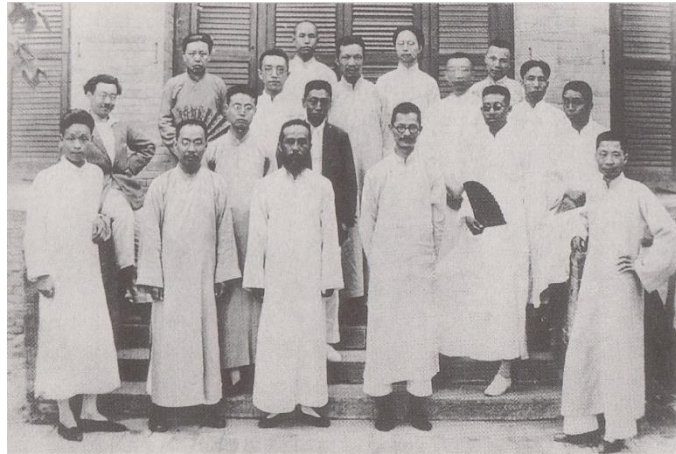
大正十一（1922）年：四月、林泰輔、死去。

- ・ 考古学という学問分野の形成期
- ・ 伝統的漢学者の役割：経学的、尚古主義的関心からの甲骨・殷墟への接近の試み
- ・ 清朝遺臣の第一線の金石学者との邂逅、学術交流

（3）「対支文化事業」の始動：日中友好時代における東亜考古学の制度化

大正十二（1923）年：三月、「対支文化事業特別会計法」公布。この年、震災で壊滅した東京帝国大学文学部列品室は考古学研究室に発展的解消、原田淑人はその資料復興を目指す。【関東大震災】

大正十三（1924）年：一月十七日、対支文化事業第一回調査会開催。二月、内藤湖南「与羅叔言」にて狩野直喜の対支文化事業の委員委嘱について羅振玉に報告。春、狩野は「準備的研究事項」として「内閣旧蔵ノ檔案類」「清朝実録・聖訓・玉牒」「清史館保存ノ史料」などの「支那文化資料ノ蒐集保存」に加え、「四庫全書ノ出版」などの「文化研究資料ノ複製出版」、そして「学術的探検」として「殷墟ノ考古学的調査」「洛陽地方ノ考古学的調査」「長安地方ノ考古学的調査」「帰化城〔現呼和浩特〕地方ノ考古学的調査」「満洲地方ノ考古学的調査」「甘肅・新疆地方ノ考古学的調査」を提案。六月二一日、対支文化事業第一回調査会開催。島村孝三郎、北京にて、旧友で北京在住の小林胖生と面会、東亜考古学提携の構想。【東洋文庫設立。十月、溥儀出宮】



1924年9月北京大学研究所国学門同仁在二院译学馆原址合影。前排左起：董作宾、陈垣、朱希祖、蒋梦麟、黄文弼；中排：顧頡剛、馬衡、沈兼士、胡鸣盛；后排：胡适、徐炳昶、李宗侗、王光伟。

東亜考古学のパートナー馬衡（左）と1924年の北京大学研究所国学門の人々（右）

大正十四（1925）年：九月、島村・濱田・原田北京出張、国立北京大学国学門の馬衡・沈兼士と会合。十月、東方文化事業総委員会の第一回会合が北京北海静心齋で開催：対支文化事業始まる。濱田・原田、殷墟踏査。細川護立侯爵の助成を受け、東京帝大の事業として楽浪漢墓調査始まる。原田、北京から合流。濱田、帰途、見学。十月、馬衡は楽浪漢墓の発掘を見学。



東方文化事業総委員会

（前列向かって左端が服部宇之吉、五人目が柯劭忞、二列目左から二人目が狩野直喜）

大正十五／昭和元（1926）年：三月、東亜考古学会「成立」、会則（初稿）まとめる。六月、『古史辨』第一冊出版（顧頡剛「自序」）。六月四日、原田淑人は東京帝大文学部に殷墟での購入品を一括寄贈。六月、濱田・島村・小林訪中、北京大学と「三条の暫定協定」、三十日、東方考古学協会成立。十月、清華大学の李濟、山西西陰村発掘。この年、「北京原人」人骨発見。十二月、昭和改元。

【参考史料①】「三条の暫定協定」

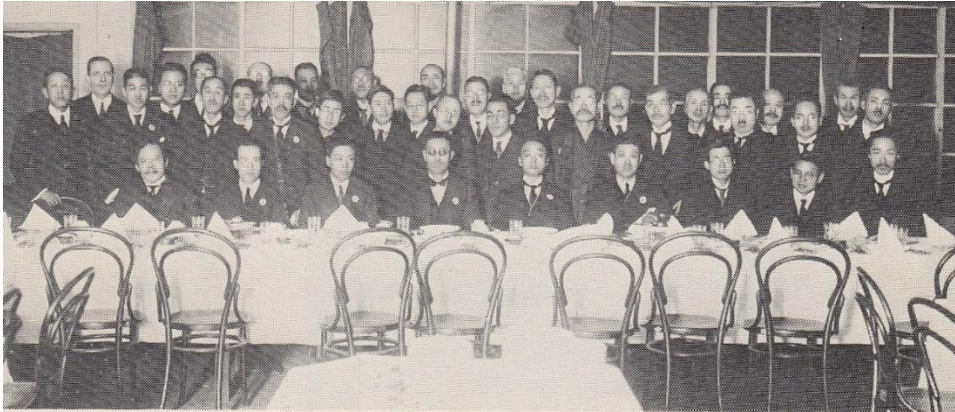
- 一、 甲方若シ其ノ国境内ニ於テ資料ノ探掘ヲ主辨スル時ハ乙方則チ人ヲ派シテ參觀シ並ニ其ノ意見ヲ貢獻スルコトヲ得
- 二、 若シ甲方ニ於テ捐金ヲ奉シ乙方ノ国境内ノ某地点ニ在リテ探掘セントスル希望ヲ有シ乙方ノ同意ヲ得タル場合ハ乙方ニアリテハ地方当局ニ対シ発掘ニ従事スベキヲ申請シ其ノ得タル資料ハ乙方ヨリ報告シ並ニ方法ヲ講シテ之ヲ保管ス
- 三、 若シ第二條ヨリ得タル資料ニシテ一方ニ於テ其ノ研究ノ結果ヲ单独ニテ発表ヲ欲スル場合ハ必ス正式報告ノ出版後発表スベキコト

昭和二（1927）年：一月、ヘディンの調査団に対し、反対運動。三月、東京帝国大学山上会議所にて東亜考古学会発会式（＝東方考古学協会第二回総会）、沈兼士・馬衡・羅庸参加。四月、東亜考古学会は遼東の貔子窩遺跡を発掘。六月、王国維自殺。夏、開封から上京した董作賓は北京大学国学門幹事に任ぜられる。八月、傅斯年、中山大学語言歴史学研究所籌備主任となる。十月、顧頡剛、中山大学に赴任、史学系主任。秋、張作霖によって在京の国立九大学の合併がなされたのを機に、董作賓は広州に南下、中山大学（予科？）副教授に任ぜられ、傅斯年と知り合う。秋、中山大学語言歴史学研究所創設。十一月、『国立中山大学語言歴史学研究所周刊』創刊号出版。十一月、中央研究院籌備会成立。冬、中山大学語言歴史学研究所は董作賓を通じて西北科学考察団への参加を希望するが、実現せず。【四月、南京国民政府成立】

【参考史料②】「東方考古学協会会則」

- 第一条 本協会ハ東方考古学協会ト称ス
- 第二条 本協会ハ智識ヲ交換シ東方考古学ノ発達ヲ謀ルヲ以テ目的ト為ス
- 第三条 本協会ハ日本東亜考古学会及ヒ中華民國北京大学考古学会ノ發起ニ由リ之ヲ組織ス
- 第四条 前記考古学会ト同性質ノ各国ノ団体ニシテ本協会ニ加入セントスルトキハ該団体ハ本協会ト協議決定ス
- 第五条 本協会ヲ組織スル各学会ノ会員ハ各該学会ノ紹介ヲ以テ本協会ノ会員タルコトヲ得
- 第六条 本協会会員ノ研究ノ結果ハ日中歐文ヲ以テ之ヲ発表ス
- 第七条 本協会ハ已ニ加入シタル各学会ヨリ各委員若干名ヲ推挙シテ委員会ヲ組織シ本協会一切ノ事務ヲ計画或ハ辨理ス
- 第八条 本協会ニ幹事若干名ヲ設ケ本協会ノ庶務会計等ヲ辨理ス
幹事ハ会員中ヨリ委員会之ヲ推定ス 委員及ヒ幹事ノ員数及ヒ権限等ハ別ニ細則ヲ以テ之ヲ規定ス
- 第九条 本協会ハ毎年一回適當ノ場所ニ於テ總會ヲ開キ会務ヲ報告シ論文ヲ発表ス 委員会ハ隨時之ヲ開ク
- 第十条 本協会ノ経費ハ会費及ヒ寄附金ヲ以テ之ニ充ツ
- 第十一条 本協会ノ事務所ハ当分左記ニテ之ヲ設ク
日本東京 東亜考古学会事務所
中華民國 北京大学研究所国学門考古研究室
- 協会役員
- 委員長 蔡元培
- 委員 李四光
- 同 沈兼士
- 同 徐炳昶

同 朱希祖
 同 陳垣
 同 服部宇之吉
 同 狩野直喜
 同 池内宏
 同 羽田亨
 同 濱田耕作
 同 原田淑人
 幹事長 島村孝三郎
 幹事 馬衡
 同 陳万里
 同 小林胖生



東大山上会議所における東亜考古学会発会・東方考古学協会第二回総会(昭2・3・26) 3列左より4番目が博士
東大山上会議所における東亜考古学会発会・東方考古学協会第二回総会(1927年3月)
(前列左から三人目が馬衡、右から三人目が原田淑人、二列目馬衡背後が駒井和愛)

- ・ 留日学生の多い、当時の北京大学。一方で、経費削減の憂き目。日本と利害関係の一致。
- ・ 馬衡は伝統的な金石学者であり、国内外を含め適当な学歴を持たなかったが、教員内部で浙江閥が勢力を持つ中で、北京大学に採用。

(4) 殷墟をめぐる角逐—中央研究院歴史語言研究所の成立と東亜考古学の暗雲

昭和三(1928)年：春、蔡元培は傅斯年・顧颉剛ほかを中央研究院歴史語言研究所常務籌備員に任命。四月、京都で「東亜考古学会(第二回?)総会」を開催。駒井和愛、北京大学国学研究館(旧国学門)に留学、馬衡の指導を受ける。五月?、傅斯年、広州にて「歴史語言研究所工作之旨趣」。この時期?、北京大学考古学会は国学門総幹事の董作賓を上海に派遣し、中央研究院院長の蔡元培に殷墟発掘の申請。六月?、董作賓、史語所籌備処の「通信員」に採用。六月、小林胖生は外務省に「今秋ノ北満発掘事業及北京ニ開催ノ予定ナル学会ニ対スル北大教授連ノ態度ハ最近著シク変調ヲ呈シ」と報告。九月、董作賓、上海から南京を経て、二十五日開封着。十月、東亜考古学会は旅順の牧羊城遺跡を発掘。十月十三日、歴史語言研究所は董作賓を派遣して殷墟遺跡第一次発掘。十月十四日、中央研究院歴史語言研究所第一次会議、二十二日、

籌備所が中山大学から正式移転、歴史語言研究所の成立（広州）。十一月、李濟、傅斯年と初めて面談、史語所に採用？。【五月、山東出兵、済南事変。六月、北伐軍北京入城。】

昭和四（1929）年：一月、ヘディン、北平帰着。ヘディン・徐旭生の講演会、杉村勇造・駒井和愛聴講に行くが、中国人聴衆に襲われそうになる。三月、発掘報告書『貔子窩』出版。三月、歴史語言研究所は李濟を派遣して殷墟遺跡第二次発掘。四月、東方文化学院東京・京都研究所発足。六月、国民政府教育部は東方文化事業中国側委員を正式に罷免。五月、中央研究院歴史語言研究所は北平に移転。十月、歴史語言研究所による殷墟の第三次発掘始まる。？日、濱田・梅原、北平着、？日、馬衡は傅斯年に協会への参加を促し、安陽にいる董作賓・李濟に取次ぎを電話で依頼。十八日、東方考古学協会委員会開催？、史語所の参加が議決される、史語所の東方考古学協会への加入問題。この時、梅原は留学中の水野とアメリカのロッジの紹介状を手に入陽訪問、十九日、梅原・水野、北平帰着。同日、東方考古学協会（第三回総会？）講演会（国立北京大学第二院大講堂、濱田耕作・梅原末治ほか）。二十一日、河南当局の妨害により史語所による殷墟発掘停止。十一月、馬衡らによる河北省易県の戦国時代の燕国の都城（燕下都）遺跡の予備調査。この年、北京原人の頭骨発見。

（５）歴史語言研究所の勝利と日本の東亜考古学の「満蒙考古学」化

昭和五（1930）年：三月、原田淑人、北平訪問（駒井・江上を帯同）、北京大学・清華大学で講演。四月、馬衡は北京大学の記念講演会で易県の燕下都遺跡の発掘計画を発表（対支文化事業の資金援助については秘匿）。五月、馬衡は易県での紛糾を避けて郷里の浙江に向かう（日中共同調査の最後の夢は絶たれる）。六月、国民政府は「古物保存法」を公布（一九三一年六月施行）、埋蔵文化財の一律国有を明記。十一月、歴史語言研究所は山東省政府と共同で山東古蹟研究会を組織し、李濟・梁思永を中心に、山東省龍山鎮城子崖遺跡の発掘調査を始める（～1931年10月）、「黒陶文化」と名付けられた文化は、後に「龍山文化」と改称。【四月、中原大戦】

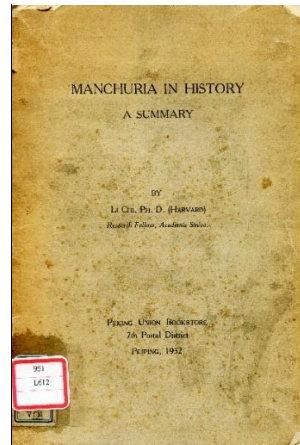
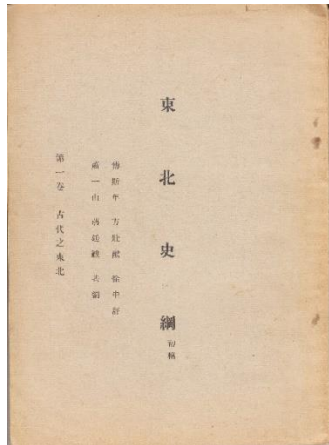
昭和六（1931）年：三月、歴史語言研究所は李濟を派遣して殷墟遺跡第四次発掘。十一月、歴史語言研究所は董作賓を派遣して殷墟遺跡第五次発掘。歴史語言研究所の梁思永は安陽西の高樓荘の後岡で、仰韶→龍山→小屯の三文化の堆積層を発見。この年、郭沫若『殷周青銅器銘文研究』出版。

【九月、満洲事変】

昭和七（1932）年：二月、中央研究院は河南省と共同で「河南古蹟研究会」を組織し、以後、共同で殷墟発掘を再開。十月、歴史語言研究所は傅斯年『東北史綱（初稿）第一卷 古代之東北』を出版、李濟は傅斯年の『東北史綱』を英訳して *Manchuria in History* 出版。【一月、上海事変。三月、「満洲国」成立、十月、リットン報告書発表】

昭和十三（1938）年：東京帝国大学文学部に考古学講座設置。

- ・ 殷墟は軍閥混戦の一角を占めたため、長きに渡って盗掘を除いて手つかずのまま留め置かれた。その封印を解こうとする日中考古学者たちの角逐、多様なアクターの出現
- ・ 日中関係の悪化だけではなく中華民国の文物保護制度の整備（発掘許認可制度）が日本の東亜考古学者たちの「満蒙」への撤退を促した。
- ・ しかしそれはかえって「満洲（東北）問題」をめぐる日中両国関係の緊張を背景に、日本の東亜考古学者たちと中華民国の考古学者たちの対立を強める結果を生んだ。



傅斯年『東北史綱（初稿）第一巻 古代之東北』と李濟（英訳）*Manchuria in History*

2、戦後への連続と断絶

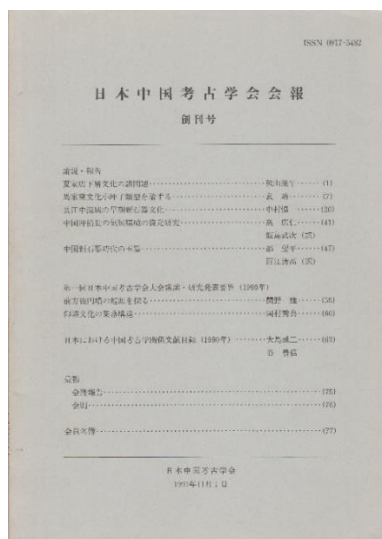
- ・ 敗戦による戦後賠償と東亜考古学
- ・ 海外調査地の喪失と東亜考古学者
- ・ 戦前の東西両帝大の考古学、特に初期の京都帝大の考古学と戦前を通じた東京帝大の考古学は、東洋学の発展と結び付いた中国を中心とした東亜考古学が中心にあった
- ・ 日本の縄文文化は理系の人類学、日本の古墳時代以後の歴史考古は国史学という暗黙の分担（発見は早かった弥生時代についてはようやく研究に着手、皇国史観との関係によって本格的な発展は戦後まで待つ必要があった）
- ・ 戦後、日本各地の考古学徒が終結した静岡の登呂遺跡発掘（1947年夏）に、かつての東亜考古学者たちも参加。調査委員会は後に日本考古学協会に発展。
- ・ 東亜考古学会は網走（北見）郷土博物館と「モヨロ調査団」を結成、北海道網走（北見）のモヨロ貝塚の発掘を行なう（1947年9月）



- ・ 以後、東大考古は北の辺境をフィールドとする（オホーツク沿岸へ、隔たった大陸への憧れと北海道考古学界との摩擦回避？）、極東からシベリアを俯瞰する新たな学術伝統として定着、1965年には北海道常呂町（現北見市）に実習施設を設置
- * 大貫静夫「スグ ユク アトフミー北海道常呂町と東京大学文学部考古学研究室」西秋良宏ほか編『北の異界—古代オホーツクと氷民文化』東京大学出版会、2002年、134～142頁
- ・ 東大東洋史で塞外史を専門とした江上波夫（東亜考古学会派遣第三期留学生）は「東大イラク・イラン遺跡調査団」（1956年～）で西アジア考古学を開拓
- ・ 京大考古は西の辺境へ：対馬調査（1948年）、壱岐調査（1950～61年）、さらにイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊（1959～67年）、アフガニスタンのバーミヤン遺跡（1970年～）へ
- * 菊池暁「民俗学者・水野清——あるいは、「新しい歴史学」としての民族学と考古学」坂野徹編著『帝国を調べる—植民地フィールドワークの科学史』勁草書房、2016年、13～45頁
- ・ 新しい情勢に対応できず「東亜考古学の亡霊」となった梅原末治
- * 穴沢咏光「梅原末治論—モノを究めようとした考古学者の偉大と悲慘」角田文衛編『考古学京都学派（増補）』雄山閣出版、1997年
- ・ いずれも戦前の東亜考古学の継承的展開
- ・ 1957年、中国科学院招聘の「訪中考古学視察団」が東亜考古学者に中国考古学者として晴れ舞台を用意した

3、20世紀末の学界状況と日中関係

- ・ 東亜考古学から中国考古学への転換の中での戦後の長い空白
- ・ 文革中の雑誌『考古』『文物』復刊（1972年～）：研究課題・関心の多様化
- ・ 1980年代後半から中国派遣の留学生の漸増：中国考古学研究会（東京・京都）
- ・ 中国考古学研究会から日本中国考古学会（1990年～）への発展



- ・ これらの活動の中心となる考古学研究者たちが中国のフィールドに回帰するのは1990年前後

- ・ 秋山進午大手前女子大学教授を代表とする「中国考古学研究会」が遼寧省文物考古研究所と行なった共同調査（1990 年～）が嚆矢、測量調査と遺物実測調査
- ・ 背景に考古学分野の涉外法規の施行：「中華人民共和国考古涉外工作管理辦法」（1990 年 12 月 31 日国務院批准、1991 年 2 月 22 日国家文物局令第一号發布施行）
- ・ 21 世紀初めの今日、中国国内の各大学考古学部・各機関考古学研究所の学部長・所長に、1980 年代前半の学生時代に日本語を第二外国語として学び、80 年代後半に日本で学位をとり、あるいは訪問学者をやっていた人々が多い。それは日本が「日中友好」の時代でなおかつ欧米が遠かった時代に手取り早い留学先であったからである。
- ・ 21 世紀の今日における中国国内条件の変化：フィールド・現地資料第一主義にならざるを得ない学問としての苦境

おわりに

- ・ こうした 20 世紀日中関係を背景とした 100 年来の日本人の中国考古学研究が、現地中国の考古学研究に何か影響を及ぼしたか否かと言えば、個別の研究者の個別の研究成果が個別の分野・地域の研究史の中で評価されることはあっても、中国考古学全体の中で例えば理論的な影響力を与えたなどということは、残念ながらなかったと言わざるを得ない。
- ・ 膨大な新発見の繰り返し、データの複製性の困難などの考古学特有の条件は、現地学界との共通・対等な条件の中での競争を不可能にするのである。
- ・ 一方で、そもそも考古学という学問が 19 世紀以来の新しい学問で、学際領域の学問であることは、外国研究としての中国考古学の存立基盤を弱いものとし続け、残念ながら結果的に以下のような学術界での位置付けを生み出してきた。

（1）歴史学から見れば一貫して「補助学」

＊ 報告者が東洋史の教員になったことで図らずも文献史学者から漏れ聞くことになった「考古学者はデータを集めて（集成）並べて（編年）くれるだけでいい、あとは我々がやるから」という思いがけない本音。

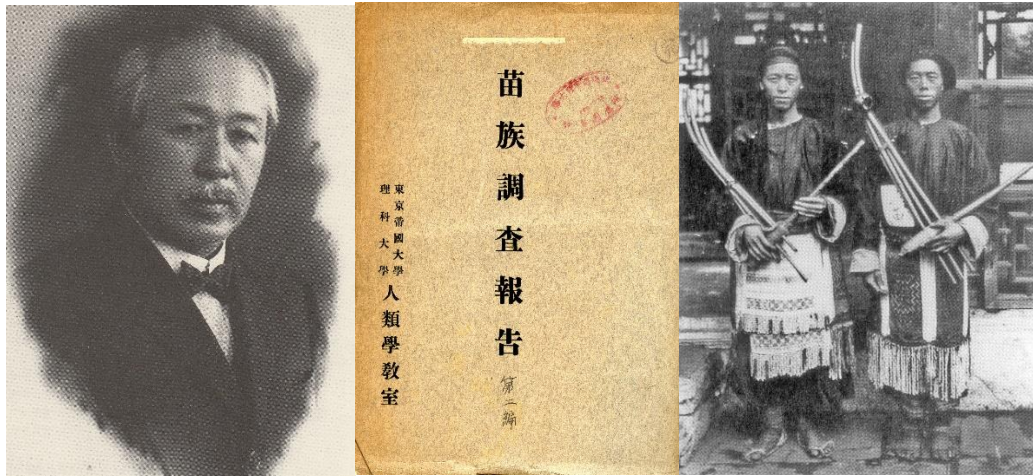
（2）日本考古学的関心を前提とした東アジア考古学の一部としての中国考古学

（3）進化論的成立の背景を持つために、個別地域的関心ではなく、普遍的な問題意識、人類史の単なる一材料

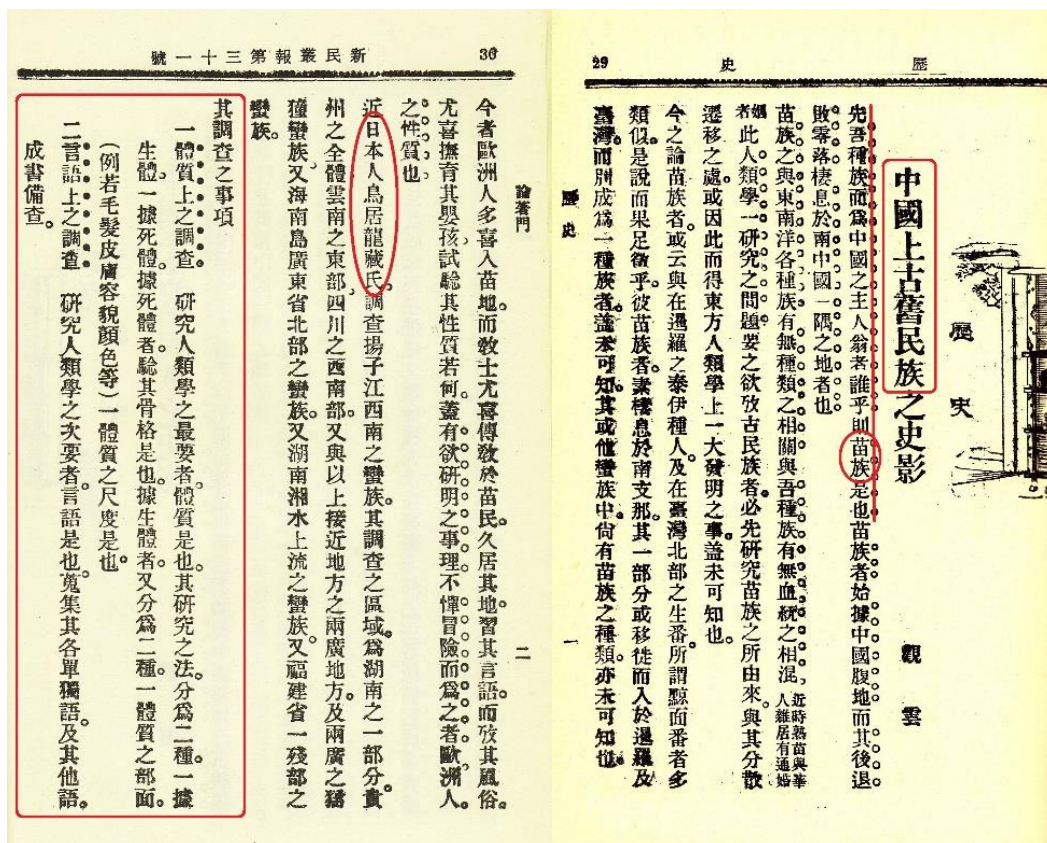
- ・ 「日本人の中国研究の軌跡」として以上のように日本人による中国考古学研究の歴史を振り返るなら、欠けているのは「中国研究」の一部としての中国考古学のあり方であると言わざるを得ない。
- ・ 中国関係の他の諸学と異なり、「東洋学」「支那学」の一部としての中国考古学から「中国研究」の一部としての中国考古学へと発展を見なかったところに悲運があり、将来の懸念もある。
- ・ もっとも、「中国研究」そのものが苦境にある現状においては、「中国研究」の一部として中国考古学を位置付けることが解決になるかどうか、それ自体が今日新たな問題となっている感も否定できない。

【余論：南中国考古学に見る特色ある展開】

- ・ 南中国辺境の基層文化への関心＝中国文化の古層を残すのではないかという期待

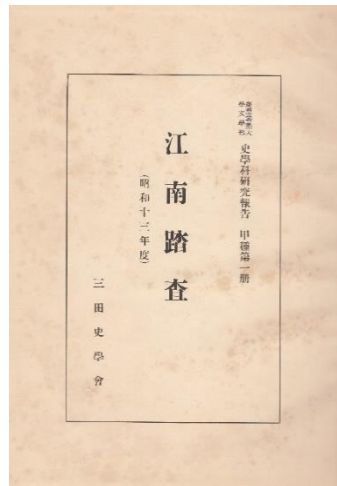


鳥居龍蔵の西南中国調査（1902～1903年）

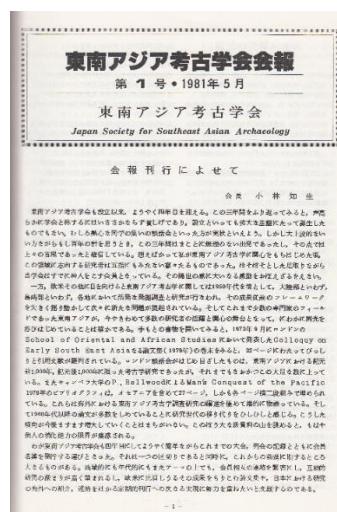
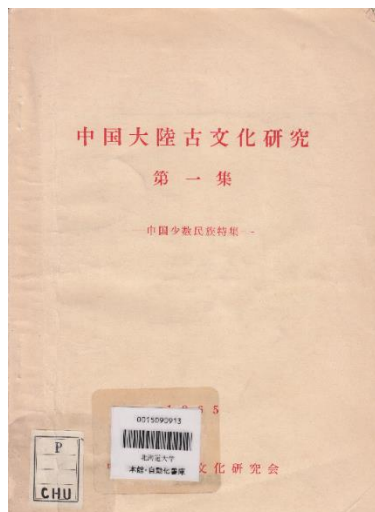


鳥居の西南中国調査成果を速報する観雲（蔣智由）「中国上古旧民族之史影」

（『新民叢報』31、1903年）



戦時下の中支那接収に際して三田史学会（慶應）が行なった江南地域の考古学調査



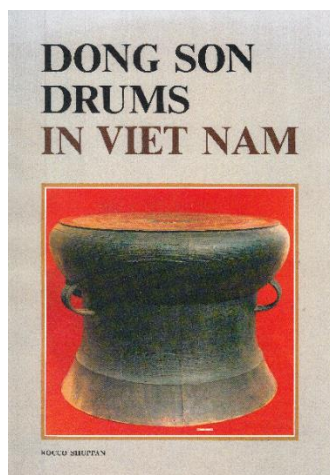
- ・ 中国大陸古文化研究会（1960 年～）
- ・ 東南アジア史学会（1966 年～）
- ・ 東南アジア考古学会（1977 年～）



1987 年、ベトナム考古学代表団と東京国立博物館での考古学遺物調査時。右から
 豊博満教授、ダオテトゥアン教授、ホーファンホア女史、ファムフイトン社会科学
 アカデミー副総裁、筆者、2 人おいてハーヴァンタン教授、1 人おいて長谷部楽爾
 教授、チュウワンタン教授、新田栄治助教授。

トヨタ財団助成によるベトナム考古学代表団の来日（1987 年）

＊ 桜井由躬雄『一つの太陽—オールウエイズ』めこん、2013 年

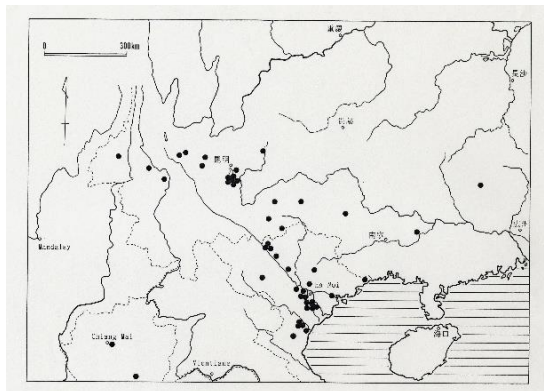


The publication of this book was made possible through cooperation between the Vietnamese Institute of Archaeology and the Department for International Cooperation of the Social Science Committee of Viet Nam, various national and local museums of Viet Nam and private owners of Dong Son drums, and a generous grant-in-aid by the Toyota Foundation.

Authorization: No 70/XBKHXH, 1987.

Printed in Japan 1990

トヨタ財団助成による『ベトナム銅鼓図録』(六興出版、1990年)の刊行



- 1990～1991年、ベトナム北部のゲアン省ランヴァック (Lang Vac) 遺跡における日越共同発掘調査 (高梨財団・三菱財団助成)
- ベトナムでの考古学調査だが実は南中国考古学の延長としての関心 (前提にあったトヨタ財団の助成による『ベトナム銅鼓図録』出版)
- 団長: 量博満 (中国考古学)、今村啓爾 (日本・東南アジア考古学)、菊池誠一 (ベトナム考古学)、西村昌也 (東南アジア考古学からベトナム考古学へ【逝去】)、山形真理子 (日本考古学からベトナム考古学へ)、吉開 (中越考古学から中国考古学へ)

* Vietnam-Japan Joint Archaeological Research Team, *Basic report on the Vietnam-Japan joint archaeological research in Nghia Dan District, Nghe An Province, 1990-1991*, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo, 2004

